

小・中学校等の特別支援教育に関する学校組織のエンパワメント促進に向けて —岩手県における「段階的な支援」体制を円滑に推進するためのツール開発—

熊谷 美智子*, 佐藤 信・佐々木 全**

(令和4年2月14日受付)

(令和4年2月14日受理)

KUMAGAI Michiko*, SATO Shin, SASAKI Zen**

Toward the Promotion of Empowerment of School Organizations for Special Needs Education in Elementary and Junior High Schools: Development of Tools for Promoting a "Phased support" System in Iwate Prefecture

要 約

岩手県における「段階的な支援」体制の円滑な推進において、各段階における実践者の手引と言える具体的な内容と手順は明らかにされていない。そこで本研究では、一次支援（小・中学校等）段階で必要な内容と手順を明示したツールを開発することを目的とした。そのために、「段階的な支援」体制の現状と課題について、開発するツールを使用する立場と想定される小・中学校等の特別支援教育コーディネーターの認識をインタビュー調査にて把握した。その結果、「段階的な支援チェックシート」の開発を行い、その有用性の検証を行って評価を得た。このことから、次の2点が指摘された。すなわち、①「段階的な支援チェックシート」は「段階的な支援」体制を円滑に推進する一助となり得ること、②さらに実践での使用の拡大と有用性の精査が必要であること、である。

1. 問題と目的

平成19年4月、学校教育法が一部改正され、「特別支援教育」がスタートした。これによって、特別な教育的支援を必要とする子どもが在籍する全ての学校において特別支援教育が実施されることとなった。

岩手県では「いわて特別支援教育推進プラン」（以下「推進プラン」と記す）に基づいて特別支援教育が推進されている。前推進プランの課題を受け、現推進プランでは、幼保・小・中・高において「適時性・継続性等の視点による段階的な支援」体制による指導・支援の充実につなげることが提示された。「段階的な支援」体制の例として、「校内での一次支援、近隣校や関係教育機関等に

よる二次支援、特別支援学校による三次支援」と文章で示されている。このイメージを図式化したものをFig. 1に示した。ここでは、各段階における具体的な動きに関わる内容や手順が明らかにされていないことから、実践者の手引と言える内容と手順を開発する必要があると言えよう。また、具体的な内容と手順が、実践者にとって明示的に用いることができる形態をとることが望ましいと

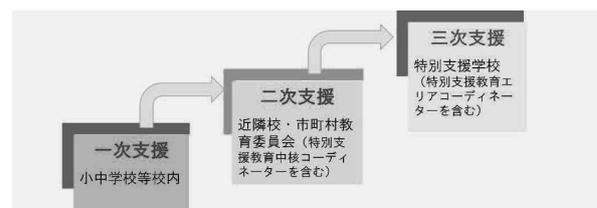


Fig. 1 「段階的な支援」体制のイメージ(筆者作成)

考え、これをツールとして開発し、活用できることを構想したいと考えた。

そこで、熊谷（2022）は、「段階的な支援」体制を推進する担当者である、岩手県教育委員会特別支援教育担当指導主事と特別支援教育エリアコーディネーター（以下「エリア Co.」と記す）へのインタビュー調査を行った。その調査結果から、ツール開発のためのコンセプトとして、一次支援機関である小・中学校等においては「自校（園）でやるべきことが分かり、子どものニーズに応じたリソースを検討・活用できること」を、三次支援機関である特別支援学校のセンター的機能においては「相手先を理解し、学校組織のエンパワメント促進を意識付けること」を求めた。ここで言う「学校組織のエンパワメント」とは、武田・斎藤・新井ら（2013）による「各学校が自校の支援体制を整備し、一人一人の子ども支援に主体的に取り組んでいく力を獲得していくこと」である。

小・中学校等にとっての「学校組織のエンパワメント」は、コンサルテーションによって促進される面があるが、後上・大久保・井上（2013）は「コンサルティ自ら考え支援策を立てるに至らないのは、学校コンサルテーションで受けた知識等を学校で共有するシステムや教師間で共有する場がなく、特別支援教育コーディネーターの働きや管理職の積極的なリーダー性に左右されているようである」と指摘し、植木田（2015）は「児童生徒の実態把握をどれほど丁寧に行っても、コンサルティが、実際の支援を進めるにあたり、個別アセスメントの結果を効果的な支援につなげたり支援体制を展開したりすることが難しい状況を目の当たりにすることは多い」という課題を挙げている。

これらのことから、先行研究における現状に対するさまざまな指摘と、前述したツール開発のためのコンセプトは、概ねツール開発のニーズとして合致していると考えられた。

求めたコンセプト「自校（園）でやるべきことが分かり、子どものニーズに応じたリソースを検討・活用できること」を念頭に、小・中学校等用

ツールとして「『段階的な支援』体制を円滑に推進するためのチェックシート〈小・中学校等用〉」の試案（以下「チェックシート（試案）」と記す）の作成に着手した。しかし、このチェックシート（試案）は、使用する側である小・中学校等のニーズや意見が反映されているわけではなく、小・中学校等において、「段階的な支援」体制の現状や課題をどう認識しているのかも明らかになっていない。

そこで、本研究では、小・中学校等における「段階的な支援」体制の現状と課題に関する認識を把握し、チェックシート（試案）に対する確定的なニーズを得て修正・改良し、その上で「『段階的な支援』体制を円滑に推進するためのチェックシート〈小・中学校等用〉」（以下「段階的な支援チェックシート」と記す）として提起すること及びその有用性を検証することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

開発するツールを使用する立場と想定される、公立の小・中学校6校の特別支援教育コーディネーター（以下「特支 Co.」と記す）7名を調査対象者とした。

2. 調査方法と分析方法

（1）インタビュー調査

20XX年8～9月に、インタビューガイドをもとに35～60分の半構造化インタビューを行った。インタビュー項目は、①「段階的な支援」体制の現状（認知の有無と認知した機会）、②特支 Co.として外部機関と連携して支援した事例（連携した機関、効果の有無とその要因、効果が得られる連携のために自校内で欠かせない手続き）、③「段階的な支援」体制にかかる課題、④チェックシート（試案）の試用感、⑤自校が連携・活用できるリソースの把握、⑥チェックシート（試案）の様式とした。インタビュー内容は許可を得て録音録画記録し、逐語録を作成して、これを分析データとした。

インタビュー項目①～③については、実際の事

例を基に回答を得た部分であることから、何度も語りや行為の文脈に立ち返りながら定性的コーディングを行う佐藤（2008）の質的データ分析法が適していると判断し、これをもって分析した。この分析の過程では、筆者と共同研究者2名との間で5回の共同分析・検討を経て、可能な限り妥当性を担保できるよう努めた。また、インタビュー項目④～⑥については、実際に使用する立場からの貴重な意見であることから、可能な限りその修正・改良に反映させることとした。

（2）アンケート調査

20XX年12月に、（1）のインタビュー調査を受け完成した「段階的な支援チェックシート」の有用性を検証するために、調査対象者に対して「段階的な支援チェックシート」を同封し、6項目からなるアンケート調査を依頼した。アンケート項目は、「段階的な支援チェックシート」作成の意図を踏まえて独自に設定し、①「校内支援体制アセスメントシート」を使用すると、自校（園）の特別支援教育校内体制を把握・判断しやすいと思うか、②「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」を使用すると、自校（園）内での取組内容や、「段階的な支援」の手順について理解し、支援を進められると思うか、③「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」を使用すると、特定のケースにおいて、支援の進捗状況が把握でき、かつ、その支援において作成・使用した資料の整理ができると思うか、④リソースマップを使用すると、自校（園）が連携し得る関係機関を把握しやすいと思うか、⑤このチェックシートは、特支Co.の仕事に役立つと思うか、⑥このチェックシートを、今後使いたいと思うか、とした。これらについて、5件法にて回答を求めた。また、各項目に対する回答の「理由」を記入する欄を設けた他、最後に「意見・感想」を求める自由記述欄を設けた。

得られた回答を「そう思う（5点）」「どちらかといえばそう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思わない（2点）」「そう思わない（1点）」と得点化した上で分析した。単純集計および得点分布から回答を検討す

るとともに、質問項目Q6「このチェックシートを、今後使いたいと思いますか」を目的変数とし他の項目を説明変数として、CS分析を行った。これには、統計分析研究所株式会社アイスタットが提供する多変量解析ソフトウェアを用いた。また、自由記述については、「作成の意図が理解された上で、それが回答に反映されているか」という視点から分類した。

（3）研究倫理

調査を行うにあたり、管轄の教育事務所や教育委員会及び調査対象者の所属長の了解を得た後、調査対象者に対して口頭と文書で研究の目的や方法、成果の公開及び研究倫理について説明し、同意を得た。

Ⅲ. 結果と考察

1. インタビュー調査

（1）「段階的な支援」体制の現状と課題

分析データから、4つのカテゴリ【「段階的な支援」に対する理解の多様さ】、【外部機関との連携による支援の現状】、【連携時の必要要素】、【「段階的な支援」による連携に感じる難しさ】と、それらを構成する7つのサブカテゴリが生成された。分析結果をTable 1に示した。なお、カテゴリは【】、サブカテゴリは《》，コードは<>、データ（語り）の内容は「」で示した。

ア. 「段階的な支援」に対する理解の多様さ

カテゴリ【「段階的な支援」に対する理解の多様さ】は、3つのコード<公式の情報に基づく理解><既存の知識に基づく理解><類似の実践に基づく理解>から構成された。

「推進プラン」や「リーフレット」、「学校教育指導指針」等の県教育委員会から提示された<公式の情報に基づく理解>だけではなく、「6年前に前任の方からの引継ぎで聞いた。」「『特別支援教育』に変わっていくところで、“体制づくり”というようなことも出てきた。そこで、自分も意識するようになった。」といった<既存の知識に基づく理解>がされていたり、「（以前勤務した地域では）もう出来上がってた、こういう流れがね、

Table 1 カテゴリー等一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
【「段階的な支援」に対する理解の多様さ】		<公式の情報に基づく理解> <既存の知識に基づく理解> <類似の実践に基づく理解>
	《連携先の選定動機》	<「医療」への期待感> <保護者への理解啓発> <専門的な視点からの助言> <保護者の希望>
【外部機関との連携による支援の現状】	《二次支援機関の認識と連携の有無》	<認識はないが連携あり> <認識があり連携あり> <認識はあるが連携なし>
	《連携から得られた効果》	<学校の支援に対する助言> <教員の納得・安心感> <保護者の理解促進> <学校と保護者の見通しの共有> <連携体制の構築>
【連携時の必要要素】	《一次支援機関内における要素》	<対象児童生徒に関する同僚との情報の共有> <対象児童生徒に関する管理職との情報の共有> <対象児童生徒に関する生徒指導・教育相談・特別支援三分野合同での定期的な情報の共有> <対象児童生徒に関する全校での定期的な情報の共有> <授業における人的資源の配置> <対象児童生徒に関する様子の記録> <生徒指導・教育相談・特別支援三分野の合同> <協働の意識> <協働の仕組み> <対象児童生徒の支援に関する合意>
	《外部機関との連携における要素》	<目的の明確化> <支援者相互の協働意識> <支援者相互の尊重> <外部機関に関する情報・知識>
【「段階的な支援」による連携に感じる難しさ】	《適時的な連携の難しさ》	<即時性のなさ> <時間確保のしにくさ>
	《継続的な連携の難しさ》	<担当者変更への不安> <支援に関するフィードバック体制の未確立> <校種間引き継ぎのしにくさ>

縦と横の。」「(前任校では) もうこの流れでみんなやっていたので。」といった<類似の実践に基づく理解>がされていたりするなど、理解のし方は多様であった。

これは、熊谷(2022)で、県やエリア Co. が「段階的な支援」体制の周知・体制整備を進めてきた結果、「段階的な支援」という考え方はほぼ周知されたと認識されていた一方で、【一次支援機関の現状】としては<「段階的な支援」体制の認知度の差>があるとされた調査結果とおおよそ共通

していると考えられた。すなわち、小・中学校等では「段階的な支援」について一律に理解されているわけではなく、特支 Co. の経験知が反映されて多様な理解がなされていることが示唆された。

イ. 外部機関との連携による支援の現状

カテゴリー【外部機関との連携による支援の現状】は、3つのサブカテゴリー《連携先の選定動機》《二次支援機関の認識と連携の有無》《連携から得られた効果》から構成された。

《連携先の選定動機》として、各校(園)の支

援だけでは難しい状況から、＜「医療」への期待感＞を抱いたり、＜専門的な視点からの助言＞を希望したりする他、子どもの困っている状況を共通理解するため＜保護者への理解啓発＞を図りたいという各校（園）側の想いがあった。また、＜保護者の希望＞によって各校（園）も含めた連携が始まる場合もあった。

《二次支援機関の認識と連携の有無》として、＜認識があり連携あり＞という「段階的な支援」を活用したケースだけでなく、「あ、巡回相談は受けましたね。そういえばそうでした。」というような＜認識はないが連携あり＞という、既にシステム化されているために意識せずに活用しているケースがあった。また、二次支援機関の機能を理解した上で＜認識はあるが連携なし＞という選択がなされるケースもあることが得られた。

上記2点から、本来、「段階的な支援」体制で一次支援機関が連携するのは二次支援機関である市町村教育委員会等になるわけだが、《連携先の選定動機》や《二次支援機関の認識の有無》、二次支援機関がもつ機能によっては、直接、一次支援機関から三次支援機関である医療や福祉と連携するケースが出てくることが示唆された。今回の調査対象者の勤務校は、二次支援の相談支援体制がすでにシステム化された市町村にあることからこのような結果が得られたが、各市町村の実情によっては、熊谷（2022）の結果で示された＜相談支援体制・運用の差異＞や＜リソースそのものの不足＞が大きく影響してくるものと考えられた。

《連携から得られた効果》として、＜学校の支援に対する助言＞や＜保護者の理解促進＞、今後の支援についての＜学校と保護者の見通しの共有＞や＜連携体制の構築＞が図られたことにより、＜教員の納得・安心感＞につながっていくことが得られた。これは、佐々木（2019）の調査結果で、関係機関と連携したことによる具体的な成果として挙げられていた「学校（園）が行う役割・手立てが明確になった」「家庭支援につながった」ことや、角南（2017）の「教師は診察後に、子どもに対する特性理解が促進されること、特性を理解

した上での指導方法における直接的助言を医療機関に求めている」という指摘と共通していると考えられた。

ウ. 連携時の必要要素

カテゴリ【連携時の必要要素】は、2つのサブカテゴリ《一次支援機関内における要素》《外部機関との連携における要素》から構成された。

《一次支援機関内における要素》として、まず、＜協働の意識＞や＜協働の仕組み＞、＜生徒指導・教育相談・特別支援三分野の合同＞が基盤にあり、その上で、実際の授業場面においては＜授業における人的資源の配置＞や＜対象児童生徒に関する様子の記録＞といった支援が必要であると認識されていた。また、それら支援の状況を含め、「回覧」「学年会」「ケース会議」などによる＜対象児童生徒に関する同僚との情報の共有＞、「報告を兼ねながら確認」をするなどして＜対象児童生徒に関する管理職との情報の共有＞が行われていた。さらに、週1回の「支援部会」や「情報交換会」などによる＜対象児童生徒に関する生徒指導・教育相談・特別支援三分野合同での定期的な情報の共有＞や「校内特別支援委員会や教育支援委員会等」による＜対象児童生徒に関する全校での定期的な情報の共有＞という場を設定し、さまざまな形で情報共有がなされていることが明らかとなり、その重要性が示唆された。また、支援の前提として、＜対象児童生徒の支援に関する合意＞が図られる必要があることも認識されていた。

＜生徒指導・教育相談・特別支援三分野の合同＞に関しては、校種に関わらずその三分野は実際の指導・支援上、「線引きできない（分けて考えることが難しい）」という現状が語られた。これは、中央教育審議会答申（2015）の「生徒指導や特別支援教育等に関わる課題が複雑化・多様化」しているという「チームとしての学校」が求められる背景と共通しており、本県においても大きな課題の一つとなっていると考えられた。また、このような現状を踏まえ、特に教科担任制や部活動などさまざまな教員が一人の生徒に関わる中学校においては、＜対象児童生徒に関する生徒指導・教育

相談・特別支援三分野合同での定期的な情報の共有の場を設定するという工夫がなされていた。これは、田中（2013）が「特別支援教育は生徒指導を基盤としている関係にあることから、生徒指導と特別支援教育を分けて考えるのではなく、両者の持つ有用な資源を合わせて指導に当たることが重要である」との指摘を体現するものと考えられた。

《外部機関との連携における要素》として、＜目的の明確化＞が前提条件としてあり、その上で＜支援者相互の協働意識＞や＜支援者相互の尊重＞が必要であると認識されていた。また、そもそも特支 Co. には＜外部機関に関する情報・知識＞が必要であることが得られた。これは、熊谷（2022）の結果で示された＜強みを生かした協働体制＞や＜相手を尊重すること＞といった【「段階的な支援」体制整備方針】、＜リソースの把握＞という

【一次支援機関に求められる力】と共通しており、連携時の必要要素として合致していると考えられた。

エ. 「段階的な支援」による連携に感じる難しさ

カテゴリー【「段階的な支援」による連携に感じる難しさ】は、2つのサブカテゴリー《適時的な連携の難しさ》《継続的な連携の難しさ》から構成された。

《適時的な連携の難しさ》として、＜即時性のなさ＞、＜時間確保のしにくさ＞が得られた。これは、山根（2018）の調査結果で、センター的機能を実施する上での課題として挙げられていた「相談ニーズが増加し、速やかな対応が難しくなったこと」や、佐々木（2019）の調査結果で、関係機関との連携で難しいと感じる点として挙げられていた「忙しくて余裕がない」こと、秋田県総合教育センター（2016）の「他の業務や会議が多く、話し合ったり相談したりするための時間設定が難しい」という校内支援体制の現状に対する指摘と共通していると考えられた。

《継続的な連携の難しさ》として、＜担当者変更への不安＞、＜支援に関するフィードバック体

制の未確立＞、＜校種間引継ぎのしにくさ＞が得られた。これは、佐々木（2019）の調査結果で、関係機関との連携で難しいと感じる点として挙げられていた「継続的に連携していくこと」や、山内・名越（2019）の「対応すべきケースが多いため、同じ学校に複数回巡回することが難しく、その場だけでの相談になり継続的に支援することが難しい」というセンター的機能に対する指摘と一部共通すると考えられた。また、＜校種間の引継ぎのしにくさ＞に関しては、岩手県教育委員会（2020）の「引継ぎシート」開発の背景にある、「進学時の引継ぎや情報提供ができていないとする保護者の肯定的評価の割合が低い傾向にある」ことや「校種ごとに追うと、進学時の引継ぎや情報共有ができていないとする肯定的評価の割合が、小学校から中学校、高等学校へと進むにしたがって低下している」という現状に合致していると考えられた。

以上のことから、熊谷（2022）の調査結果で示された「段階的な支援」体制の現状と課題と、本研究の小・中学校における「段階的な支援」体制の現状と課題に関する認識は、概ね一致していると考えられた。また、社会情勢や先行研究での指摘とも共通していることも踏まえ、ツールを開発すること及びそのツール内容へのニーズが把握された。

（2）チェックシート（試案）に対する意見

調査対象者に、チェックシート（試案）を試用してもらうことにより、さまざまな意見が得られた。使用する際の配慮事項として「説明書き（前書き）」や「使い方のガイド」があると分かりやすいという意見が多く出された他、チェック項目の内容や記入欄の整理、文言の吟味の必要性なども挙げられた。また、特定のケースにおいて「段階的な支援」体制を活用して支援を進める際のシートに関しては、使用者である特支 Co. の経験の長短によって使いやすい様式が異なるのではないかということ、リソースの把握について各校で工夫しながら取り組まれているが、ベテランの特支 Co. であっても悩む場合があることが把握できた。

自校（園）の特別支援教育校内体制をアセスメントするためのシートに関する意見を Table 2 に、特定のケースにおいて「段階的な支援」体制を活用して支援を進める際のシートに関する意見を Table 3 に、リソースの把握に関する意見を Table 4 に示した。

以上の意見を受け、チェックシート（試案）の

修正・改良を行い、「段階的な支援チェックシート」が完成した。これは、①作成の「背景」や「目的」、「使い方」を明記した説明文書、②校内支援体制アセスメントシート、③「段階的な支援」進捗状況チェックシート、④リソースマップ（見本として盛岡市版）の4点で構成される。これを、Fig. 2～5に示した。

Table 2 自校（園）の特別支援教育校内体制をアセスメントするためのシートに関する意見

○文言の吟味，解釈の範囲に関して

- ・「段階的な支援」体制に関する説明が不足している。
- ・「段階的な支援」体制についての「理解」とはどこまでのものか。
- ・「二次支援機関，三次支援機関の把握」はどこまで行われていけば良いか。

○使用する際の配慮事項に関して

- ・このチェックを，どの時点で行えば良いか。
- ・使用するための説明書き（前書き）があると良い。

Table 3 特定のケースにおいて「段階的な支援」体制を活用して支援を進める際のシートに関する意見

○記入欄や項目内容に関して

- ・実態把握欄に「保護者の意向」が記入できると良い。
- ・「連絡」「報告」「相談」が一項目としてまとまっていると良い。

○使用する際の配慮事項に関して

- ・使い方のガイド（「目的」の記載）があると良い。
- ・使用するためのフローチャートやDVDがあると良い。
- ・「段階的な支援」体制に関する説明が不足している。
- ・必ず「この順番」「この手順」が必要というわけではないという注意書きがあると良い。

○様式に関して

- ・それぞれの資料を挟みこむためには，一次・二次・三次が分かれていると良い。
- ・（支援の）見通しをもつためには，1枚にまとまっている方が良い。
- ・1枚になっていて，かつフローチャートのようになっていると良い。
- ・「段階的な支援」体制が分かっている人は，分かれている方が良い。流れを把握できていない人は，1枚になっている方が良い。

Table 4 リソースの把握に関する意見

○困っていること

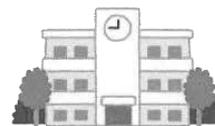
- ・どのようなルートで，誰に電話をすれば良いか悩むことがある。
- ・市や県の行政機関，特に福祉関係との連携が弱いと感じている。

○「リソースマップ」に期待すること

- ・どういった場合に，どこに連絡するかが分かると使いやすい。
- ・支援内容や役割（機能）が明記されている物があると良い。
- ・自校（園）を真ん中に置いた，マップ的な様式だと分かりやすい。（一覧では判断が難しい）

「段階的な支援」体制を円滑に推進するためのチェックシート <小・中学校等用>

このチェックシートは、
 ◇校内支援体制アセスメントシート と ◇「段階的な支援」進捗状況チェックシート
 で構成されています。



◇校内支援体制アセスメントシートについて

【背景】

平成 19 年 4 月の学校教育法改正により、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において特別支援教育が実施されること、すなわち「全ての学校・全ての学級で行う特別支援教育」(文部科学省, 2017) が法制化されました。
(文部科学省(2017)「発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン」)

各校(園)においては、校長(園長)のリーダーシップの下、特別支援教育に関する組織的な支援体制の確立が求められ、校内支援委員会の設置率や特別支援教育コーディネーター(以下「特支 Co.」)と記す)の指名率が 100%になっている一方で、校内支援体制が十分に機能していないという課題が散見されます。

【目的】

* 自校(園)の特別支援教育校内体制について把握・判断=「アセスメント」し、校内体制整備及び充実につなげる。

【使い方】

- 年に1回を目処に、活用しましょう。(例)・年度末反省時に使用し、次年度計画に反映できるようにする。
 ・新年度スタート時に使用し、不足している部分について取り組む。
- 新たに「特支 Co.」に指名された際には、まず目を通してみましょう。
- 特支 Co. だけでチェックするのではなく、管理職と一緒に確認することをお勧めします。

◇「段階的な支援」進捗状況チェックシートについて

【背景】

岩手県の特別支援教育は、「いわて特別支援教育推進プラン」(以下「推進プラン」と記す)に基づいて推進されています。現推進プラン(2019~2023)において、幼保・小・中・高において「適時性・継続性等の視点による段階的な支援」体制による指導・支援の充実が提示され、その「段階的な支援」体制の例として、「校内での一次支援、近隣校や関係教育委員会等による二次支援、特別支援学校による三次支援」と文章で示されました(図1)。しかし、各段階における具体的な動きに関わる内容や手順については明らかになっていません。



図1 「段階的な支援」体制 イメージ

【目的】

- * 「段階的な支援」体制において、小・中学校等が自校(園)内でどのような取組をし(内容)、どのような流れや手続きで次の段階に進行すれば良いか(手順)を示す。
- * 「段階的な支援」の進捗状況が分かり、かつ、その支援において作成・使用した複数の資料の「目次」としての機能をもつ。

【使い方】

- 特定のケースにおいて、校外で連携を図りながら支援を進める際に、活用しましょう。
- 進め方の基本的な流れ(図2)は、次のとおりです。
 - ①シートⅠの項目に沿って、自校(園)内での一次支援に取り組む。
 - ②一次支援段階での支援が有効であれば、そのまま支援を継続し、さらに専門的な支援が必要であると判断したら、二次支援につなぐ。
 - ③二次支援段階も同様に判断し、必要に応じて三次支援につなぐ。
 - ④年度をまたいで支援を行い、引継ぎが必要な場合には、シートⅣに新旧担当者名を記入する。

※二次支援段階においては、市町村の特別支援教育体制に応じて、使用しない項目や項目の順番が変更となることも想定されます。

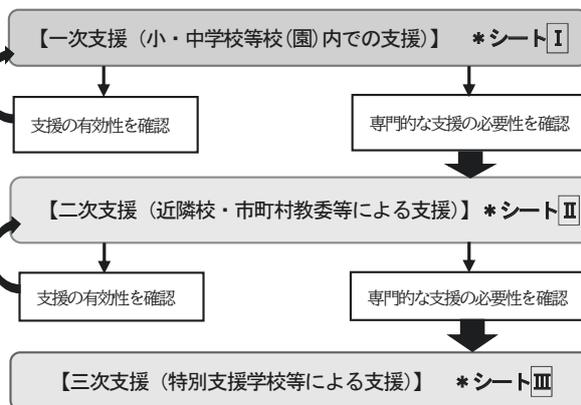


図2 「段階的な支援」進め方 基本的な流れ

Fig. 2 段階的な支援チェックシート ①説明文書

校内支援体制アセスメントシート



*自校(園)で取り組んでおり、根拠資料も確認できた場合に✓をつけてください。

取組項目 [根拠資料名を記入する]	チェック
1. 特別な支援を必要とする幼児児童生徒への支援について、自校(園)としての方針や取組事項が明示されている。 〔 (例：学校経営計画) 〕	<input type="checkbox"/>
2. 特別な支援を必要とする幼児児童生徒への支援を行う担当部署や担当者について、校(園)内組織に位置付けられており、職務内容が明示されている。 〔 (例：学校経営計画) 〕	<input type="checkbox"/>
3. 特別支援教育コーディネーターが、自校(園)に在籍する特別な支援を必要とする幼児児童生徒について把握している。 〔 (例：名簿一覧) 〕	<input type="checkbox"/>
4. 特別支援教育コーディネーターが、自校(園)において、特別支援教育に関する窓口だと周知されている。 〔 (例：組織図) 〕	<input type="checkbox"/>
5. 学年・学団単位で、特別な支援を必要とする幼児児童生徒に関する情報交換・情報共有がなされている。 〔 (例：学年会資料) 〕	<input type="checkbox"/>
6. 定期的にあるいは必要に応じて、特別支援教育に関する校(園)内委員会を開催し、情報交換・情報共有がなされている。 〔 (例：年間行事予定表) 〕	<input type="checkbox"/>
7. 「個別の指導計画」を作成している。 ※特別支援学級在籍および通級による指導を受けている児童生徒は必須 〔 〕	<input type="checkbox"/>
8. 幼児児童生徒一人一人の多様性を踏まえ、「いわての「授業ユニバーサルデザイン」(岩手県教育委員会)」を周知・参照するなどして、授業(保育)改善に努めている。 https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/027/151/tomonimanabitomoniikiruiwate.pdf 〔 (例：校(園)内研修資料) 〕	<input type="checkbox"/>
9. 「段階的な支援」体制について把握している。 〔「いわて特別支援教育推進プラン(2019~2023)」p14〕	<input type="checkbox"/>
10. 自校(園)が連携し得る二次支援機関、三次支援機関について、把握している。 〔 (例：リソースマップ) 〕	<input type="checkbox"/>

Fig. 3 段階的な支援チェックシート ②校内支援体制アセスメントシート

「段階的な支援」進捗状況チェックシート



対象幼児児童生徒名

I 【一次支援】 *取り組んだら✓をつけてください。ただし、1.については、一つでも確認できれば✓をつけてください。

取組項目 [資料名を記入し、添付する]	チェック
1. 支援を必要とする幼児児童生徒を把握(アセスメント)した。 *当てはまるところに○をつけてください。 ◇ 虐待 [有 ・ 疑い ・ 無] ⇒ 有または疑いの場合は、相談・通告する	
(1) 担任の訴え [有 ・ 無]	□
(2) 医療的所見 [有 ・ 無] [別紙資料 No.]	
(3) 発達検査等の所見 [有 ・ 無] [別紙資料 No.]	
(4) その他専門家等からの所見 [有 ・ 無] [別紙資料 No.]	
(5) 個別の指導計画の作成 [有 ・ 無] [別紙資料 No.]	
(6) 保護者の訴え [有 ・ 無] [別紙資料 No.]	
2. 各種所見を基に、自校(園)内で対応した。	
(1) 校(園)内委員会の開催 [別紙資料 No.]	□
(2) 支援体制と役割分担の確認 [別紙資料 No.]	□
(3) 支援内容や経過の記録 [別紙資料 No.]	□
(4) 支援に対する評価 [別紙資料 No.]	□
3. 自校(園)内での支援の評価を基に、支援を継続するか、またはさらに専門的な支援が必要であるかを判断した。 *判断した方に✓をつけてください。 <input type="checkbox"/> 一次支援での支援を継続する <input type="checkbox"/> 二次支援機関へ連絡・依頼する → II へ	□

II 【二次支援】 *取り組んだら✓をつけてください。ただし、2については、二次支援機関が決定したら✓をつけてください。

取組項目 [資料名を記入し、添付する]	チェック
《市町村教育委員会への連絡》	
1. 自校(園)を管轄している市町村教育委員会へ連絡をし、一次支援の状況を報告および二次支援の対応を相談した。	□
2. 二次支援機関(連携先)の希望を伝え、決定した。*決定した機関に✓をし、当てはまるところに○をつけてください。 <input type="checkbox"/> 市町村教育委員会 [指導主事 ・ 巡回相談員 ・ 専門家チーム]	□
<input type="checkbox"/> 特別支援教育中核コーディネーター [学校名: , 氏名:]	
<input type="checkbox"/> 近隣の特別支援学級担当者 [学校名: , 氏名:]	
<input type="checkbox"/> その他、市町村のリソース [機関名:] [職名・担当者名:]	
3. この段階で、さらに専門的な支援が必要であると判断した。 ⇒ 三次支援機関へ連絡・依頼する → III へ	□
《二次支援機関と連携しての支援》	
4. 決定した二次支援機関へ連絡をし、一次支援の状況を報告および二次支援の対応を相談した。	□
5. 担当者を確定した。 [自校(園): , 二次支援機関:]	□
6. 二次支援機関と連携して、支援を実施した。	
(1) 支援会議の開催 [別紙資料 No.]	□
(2) 支援体制と役割分担の確認 [別紙資料 No.]	□
(3) 支援内容や経過の記録 [別紙資料 No.]	□
(4) 支援に対する評価 [別紙資料 No.]	□
7. 二次支援機関と連携しての支援の評価を基に、支援を継続するか、またはさらに専門的な支援が必要であるかを判断した。 *判断した方に✓をつけてください。 <input type="checkbox"/> 二次支援機関と連携しての支援を継続する <input type="checkbox"/> 三次支援機関へ連絡・依頼する → III へ	□

III 【三次支援】 *取り組んだら✓をつけてください。

取組項目 [資料名を記入し、添付する]	チェック
《三次支援機関との連絡》	
1. 自校(園)を担当している三次支援機関へ連絡をした。 *当てはまるところに○をつけてください。 [特別支援学校 ・ 特別支援教育エリアコーディネーター ・ その他県のリソース] [機関名	□
2. 一次支援、二次支援の状況を報告し、三次支援の対応を相談した。	□
3. 担当者の確定をした。 [自校(園): , 三次支援機関:]	□
《三次支援機関と連携しての支援》	
4. 三次支援機関と連携して、支援を実施した。	
(1) 支援会議の開催 [別紙資料 No.]	□
(2) 支援体制と役割分担の確認 [別紙資料 No.]	□
(3) 支援内容や経過の記録 [別紙資料 No.]	□
(4) 支援に対する評価 [別紙資料 No.]	□
5. 三次支援機関と連携しての支援の評価を基に、支援を継続するかどうか判断した。*判断した方に✓をつけてください。 <input type="checkbox"/> 三次支援機関と連携しての支援を継続する <input type="checkbox"/> 支援を終了する	□
《まとめ》	
☆ 次年度も継続して支援する必要があるかどうか判断した。 <input type="checkbox"/> 支援を終了する <input type="checkbox"/> 支援を継続する	□

【自校(園)の担当者の変更】
現担当者氏名:
⇒ 新担当者氏名:

Fig. 4 段階的な支援チェックシート ③「段階的な支援」進捗状況チェックシート

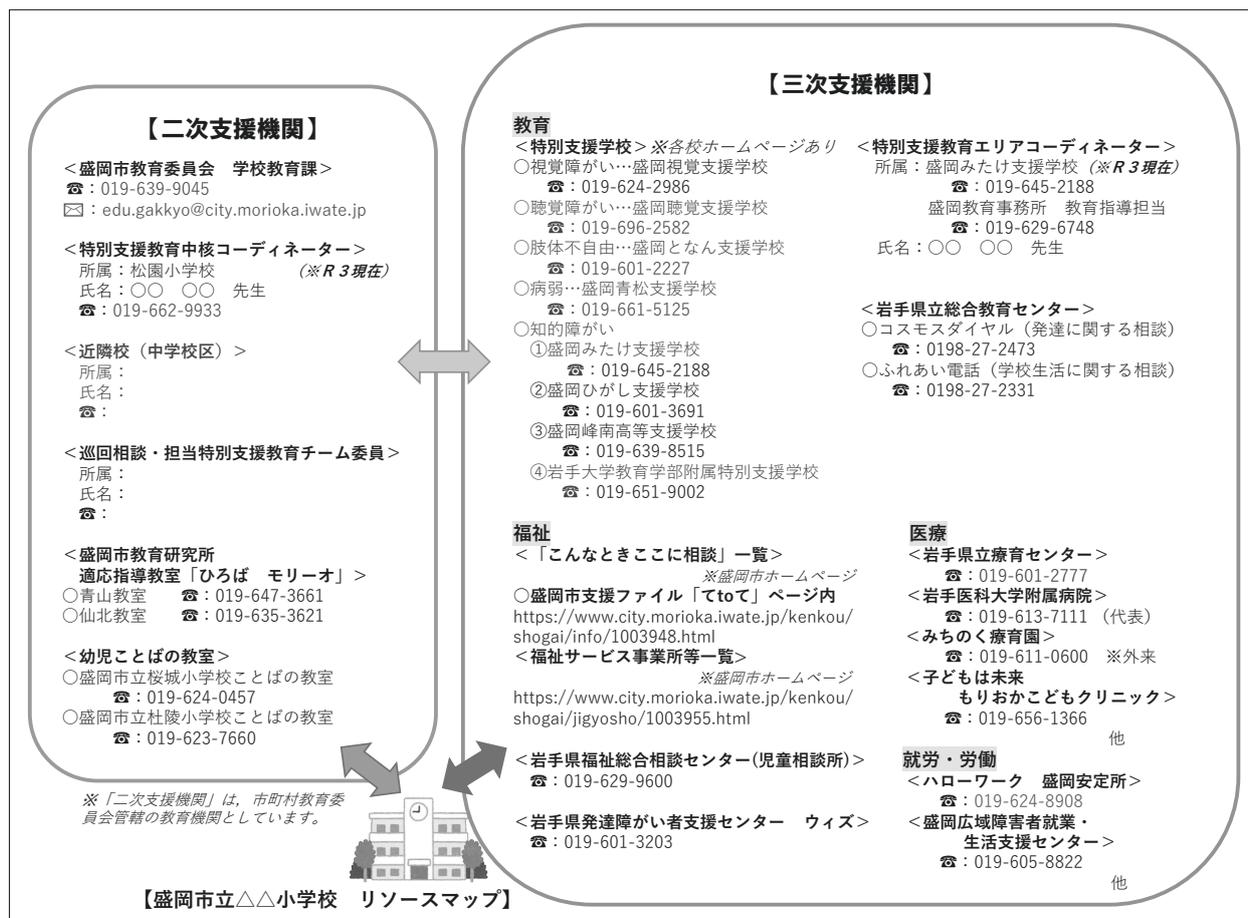


Fig. 5 段階的な支援チェックシート ④リソースマップ (盛岡市版)

2. アンケート調査

アンケートは7名中6名から回答があり、回収率は85.7%であった。

(1) 集計結果から見た結果と考察

アンケート調査の集計結果を Table 5 に示した。単純集計結果では全ての回答が4～5点となり、得点分布でも平均値が全て4.0以上であり、肯定的な評価であった。C S分析は、目的変数の値が全て4点以上であったため、分析不能であった。以上から、全体的に肯定的な評価が得られたため、「段階的な支援チェックシート」の有用性は概ね高いと解釈した。

(2) 自由記述から見た結果と考察

「チェックシート作成の意図が反映された記述内容」を Table 6 に示した。ここでは、「確認したい内容が盛りこまれている」「整理できる」「把握

できる」等、作成の意図が理解された上で評価されている意見が示された。一方、「改良点や新たな視点が含まれた記述内容」を Table 7 に示した。ここでは、さらなる修正・改良点の指摘や、作成の意図を超えた活用方法についての意見が示された。

以上から、次の2点が示唆された。①「段階的な支援チェックシート」は、小・中学校等において「段階的な支援」体制を円滑に推進するために活用されるだけでなく、特支 Co. の業務遂行にも役立つツールであること。②市町村や学校毎の実情の差異に応じて、内容や形式をアレンジする必要があること、である。このことは、今後、「段階的な支援チェックシート」を周知する際の留意事項であると考えられた。

Table 5 アンケート調査集計結果

質問項目	5点	4点	3点	2点	1点
	(そう思う)	(どちらかといえばそう思う)	(どちらともいえない)	(どちらかといえばそう思わない)	(そう思わない)
Q1. 「校内支援体制アセスメントシート」を使用すると、自校(園)の特別支援教育校内体制を把握・判断しやすいと思いますか。	5 (83.3)	1 (16.7)	0	0	0
Q2. 「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」を使用すると、自校(園)内での取組内容や、「段階的な支援」の手順について理解し、支援を進められると思いますか。	5 (83.3)	1 (16.7)	0	0	0
Q3. 「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」を使用すると、特定のケースにおいて、支援の進捗状況が把握でき、かつ、その支援において作成・使用した資料の整理ができると思いますか。	5 (83.3)	1 (16.7)	0	0	0
Q4. 「リソースマップ」を使用すると、自校(園)が連携し得る関係機関を把握しやすいと思いますか。	6 (100)	0	0	0	0
Q5. このチェックシートは、特別支援教育コーディネーターの仕事に役立つと思いますか。	6 (100)	0	0	0	0
Q6. このチェックシートを、今後使いたいと思いますか。	5 (83.3)	1 (16.7)	0	0	0
※回答者数 (%)					

Table 6 チェックシート作成の意図が反映された記述内容

-
- 「校内支援体制アセスメントシート」に関して
 - ・必要なことが全て網羅されている。
 - ・確認することで、取組について再確認できる。
 - ・支援が必要な児童を把握したり、校内体制を整えたりする時に確認したい内容が盛り込まれている。
 - ・根拠資料名を記入することにより、把握しやすくなった。
-
- 「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」：自校(園)内の取組内容や手順の理解に関して
 - ・学年が進んでも継続的な支援ができる。
 - ・手順を踏んで確認できるようになっている。
-
- 「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」：進捗状況の把握や作成・使用した資料の整理に関して
 - ・支援終了後の資料整理だけではなく、過去の参考資料としても活用できる。
 - ・別紙資料にナンバリングしていくことで、整理できると思う。
 - ・特定のケースの支援のし方が明確に把握できそう。
-
- 「リソースマップ」に関して
 - ・効果的に把握できると思う。
 - ・わかりやすい資料になったと思う。
-
- チェックシートの使用による、特支 Co. の業務への有用性について
 - ・間違いなく役立ちます。少なくとも特支 Co. の7割程度の仕事はできるかと思います。
 - ・支援方法の参考にできると思われる。
 - ・対象児の資料をまとめたり、引き継いだりする時に役立てられると思う。
-

Table 7 改良点や新たな視点が含まれた記述内容

○「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」：自校(園)内の取組内容や手順の理解に関して
・初めて担当された先生で、校内体制が整っていない場合、一次支援2の進め方や様式などに悩まれるかなと思いました。参照とする資料例があるとよいかと思います。
・職員への周知に役立つように思われる。
○「『段階的な支援』進捗状況チェックシート」：進捗状況の把握や作成・使用した資料の整理に関して
・個別の指導計画や引継ぎシートなどの義務化された資料の作成手順・活用・管理についても記載があるとよいかと思います。(市町村で異なるため難しいと思いますが…)
○「リソースマップ」に関して
・医療については、各市町村によって異なるため、学校毎にそれらを明記する欄があってもよい。
・保護者相談時の参考資料としても活用できる。

Ⅳ. まとめ

本研究の結果と考察に基づき、以下が本研究における成果と課題であると考えた。

成果は、「段階的な支援チェックシート」の開発である。熊谷(2022)で得られたコンセプトに沿った上で、インタビュー調査で得られた小・中学校の現状や課題、チェックシート(試案)に対する意見を反映させることにより、「段階的な支援チェックシート」の提起に至った。また、有用性の検証から、「段階的な支援チェックシート」は、「段階的な支援」体制を円滑に推進する一助となり得ると考えられた。

一方で、課題としては、次の2点が挙げられた。すなわち、①「段階的な支援チェックシート」の有用性の精査である。本研究では、試用後の改善と検証は行ったものの、実践では未使用である。小・中学校等での実践において使用を拡大し、かつ有用性の検証を重ねることで、普及を促進できるだろう。②「段階的な支援チェックシート」の内容・形式の活用上のアレンジである。岩手県には33市町村あり、6つの教育事務所が設置されており、各市町村・教育事務所単位で実情に応じた特別支援教育の相談支援体制が構築され、運用することが求められている。それぞれの地域・学校

の実情に応じた内容・形式にしていく必要があると考えられた。

今後は、特別支援学校センター的機能用ツールの開発を行い、センター的機能の充実を図ることで、小・中学校等の特別支援教育に関する学校組織のエンパワメント促進へとつなげていきたい。

謝辞

本研究に際して、調査にご理解ご協力いただいた先生方をはじめとする関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

引用文献

- 秋田県総合教育センター(2016)特別支援教育のための校内支援体制ケースブックー校内組織を活用したチームアプローチ。 <https://www.akita-c.ed.jp/~ctok/casebook.pdf> (2022年1月8日閲覧)。
- 後上鐵夫・大久保圭子・井上和久(2013)特別支援学校等で実施する学校コンサルテーションの課題について。大阪体育大学健康福祉学部研究紀要, 11, 61-80。
- 岩手県教育委員会(2019)いわて特別支援教育推進プラン(2019~2023)。 <https://www.pref.iwate.jp/>

- _res/projects/default_project/_page_/001/006/404/iwatetokusipurann.pdf (2020年6月22日閲覧).
- 岩手県教育委員会 (2020) 特別支援教育指導資料 No.47 引継ぎシート 作成・活用ガイドブック. https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/028/789/hikitugigaido.pdf(2022年1月8日閲覧).
- 熊谷美智子 (2022) 「いわて特別支援教育推進プラン (2019~2023)」における「段階的な支援」体制の推進に資するツール開発に向けた予備的検討-県教育委員会担当者へのインタビュー調査から-. 2021年度日本教職大学院協会年報別冊『実践研究成果集』(印刷中).
- 文部科学省 (2015) チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申). 3, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf (2022年1月8日閲覧).
- 佐々木祐子 (2019) 特別支援教育コーディネーター業務の推進に関する研究-多様なニーズをもつ一人一人の子供の育ちを支える関係機関連携を目指して-. 17-19, http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/h31/tokushi_co/tokushico01_shiryo.pdf (2020年9月28日閲覧).
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法-原理・方法・実践-. 新曜社.
- 角南なおみ (2017) 発達障害特性を持つ子どもの医療受診に対する教師の期待. 日本心理学会大会発表論文集, 81, 930, https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/81/0/81_1D-091/_pdf/-char/ja (2022年1月8日閲覧).
- 武田篤・斎藤孝・新井敏彦・佐藤圭吾・藤井慶博・神常雄 (2013) 特別支援教育における学校コンサルテーションの充実に向けて~コンサルタントが抱く困難性と求められる専門性~. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 35, 79-85.
- 田中克人 (2013) 生徒指導担当者と特別支援教育担当者の協働による指導実践モデルの構築-定時制高校におけるケース会議の実践を通して-. 兵庫教育大学学校教育研究科 修士論文及び特定の課題についての学修の成果 本文 (オープンアクセス), <http://hdl.handle.net/10132/10833> (2022年1月8日閲覧).
- 植木田潤 (2015) 「学校アセスメントシート」の作成と試行結果の推移-学校コンサルテーションにおける活用から-. 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 10, 37-48
- 山根基義 (2018) 特別支援学校におけるセンター的機能の充実に関する研究-多様なニーズへの対応を可能にする校内体制の確立を通して-. 15, http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/h30/senta-tekikino/sentatekikino02_happyshiryo.pdf (2022年1月8日閲覧).
- 山内明美・名越斉子 (2019) 学校コンサルテーションから考えるセンター的機能のあり方 (1) -コンサルティや学校の状況に応じたコンサルテーションスキルの検討-. 埼玉大学紀要 教育学部, 68(2), 121-134.